

『安心決定鈔』と師親鸞（一）その成立の研究

谷川 守正

1. 問題の所在

『安心決定鈔』は、40年以上にわたって読み飽かなかったと述懐する蓮如にとって、生涯学習のテキストとも云える。生涯教育学にとって、それは貴重な事例の一つであり、研究対象に値する。しかし蓮如のような影響を受けた人物は、その前に他にいないのであろうか。

蓮如と柳宗悦の高い評価にもかかわらず、その作者名、成立時期はまだ特定されない。伝持過程から本願寺系の作者名が挙げられるが、覚如以前ではないか。また名目から西山義とされるが、阿日房以前ではないか。このようにわれわれはまず成立時期を絞り込む。

「機法一体」などの名目の蔭に隠れた『安心決定鈔』の特徴は主に次のとおりである。

- ①龍大善本叢書の空観本と蓮如本は大同小異であり、『真宗聖教全書』に依拠できる。
- ②本文と一つ書きから成るが、多出する「機法一体」と「われら」は前者のみにある。
- ③「かるがゆへに」は本文を章節構成にし、「一 自力他力日輪の事」を主文にする。
- ④次の「一 四種往生の事」は『西方指南抄』下末巻首の「四種往生事」にのみ出る。
- ⑤一つ書き中の「五百長者の子」は坂東本において親鸞晩年加筆の行巻のみに出る。
- ⑥一つ書き中の「天親菩薩の往生論」に晩年の親鸞著述に一連の拘りが見受

けられる。

- ⑦引用経釈に漢文体と混合体があり、後者は『真宗聖教全書』の註によれば大意が多い。
- ⑧証空と弟子蓮生が経釈の省略引用に付ける独自の「トライハ」の表現は用いられない。
- ⑨本文と一つ書きを倒置すると教行信証後序の六字名号と『礼讃』の師資相承文になる。

2. 四種往生の事

蓮如がそれを生涯を通じてどう学び続け、どのような金を掘り出したかに関心を持つわれわれは、先行研究が成功しなかった作者探しよりもまず時期の特定に着目するのは、伝持過程の事実と名目分析の用例をそのままそっくり認めつつ、まったく新しい手掛かりをそこに見出したからである。すなわち黒谷聖人の御料簡の「四種往生」と多用される接続詞「かるかゆへに」は、『安心決定鈔』の成立時期を特定する重要な手掛かりとなる。

「四種往生の事」は浄土宗関係の法然伝などに登場しない言行録であり、法然伝資料として貴重である。しかしそれは「四種往生事」として親鸞晩年の『西方指南抄』下末の冒頭にのみ登場する。『西方指南抄』下末の制作年月日は、親鸞の奥書から1256年11月8日に確定している。われわれは幸い資料研究を助ける原本の影印本（『親鸞聖人真蹟集成、五・六』、法蔵館）も利用できる。すなわちわれわれは両者の書式と内容の書誌学的比較によって、両者の成立時期の前後関係を一目瞭然に解明する簡単な手掛かりにする。

言うまでもなく『西方指南抄』は法然上人の語録であり、浄土宗の『元亨版語灯録』より18年早く成立している。もし成立時期の確定した『西方指南抄』が後であれば、『安心決定鈔』の成立時期は限定され、特定しやすくなる。また「機法一体」の用語例は本願寺では覚如の『願願鈔』（1340年）、西山派では円空の『深草抄』（1273年）が初出（加藤義諦編『安心決定鈔について』1993年）だが、1256年以前であれば、両説は斥けられる。

3. 『西方指南抄』との前後関係

『西方指南抄』下末冒頭の「四種往生事」の影印本は墨字と朱字とが濃淡

によって判読できる。その冒頭のグラビア頁より遙かに鮮明な『西方指南抄』全巻のカラー写真の所在を十年前に知ったが、われわれの研究にとってはとりあえずこの影印本で十分である。

それは漢文体の簡条書きにされ、四種の往生の配列順は同じである。漢字の読みを助けるために「一正念念仏往生」と「二狂乱念仏往生」の「念仏往生」、「三無記心往生」の「往生」、朱字の「懷感作」そして漢数字を除いて総ての漢字に読みがなが添えられる。この点はほぼ総ての漢字に読みがなを付ける『安心決定鈔』の加点の場合に同じである。

それぞれの往生の出典も同じであるが、最後の往生の出典については「法鼓經言云々」として短い引用文を付ける。出典からの引用文の漢字にも読みがなを付けるが、末尾の字の「往生云々」の「生云々」の振りがなだけは省略する。以上が観察される事実である。

両者の「四種往生」を比較して『安心決定鈔』の「一には正念往生」と「二には狂乱往生」が「一正念念仏往生」、「二狂乱念仏往生」と簡条書きに改められ、「念仏往生」を印象付けるために振りがなを省略している。「三には無記往生」も「三無記心往生」に改められ、同じく「往生」に振りがなが省略される。そして「四には意念往生」はそのままであり、「往生」にも振りがなが付くが、出典からの引用文が短く添えられる。

『西方指南抄』は六行書きにされ、最後の「四種往生事」は五行書きのやや大きい目の字で第三の往生までは簡条書きにされ、最後の「四意念往生」と經典の引用は、五行目に二行文を割り書きにされる。そのためにそれぞれの往生の下に出典が書かれるとき、「四意念往生」の下空白が少なくなり、前の行との中間の位置に記入される。そのためにわざわざ「四意念往生」の場合にのみ經典からの引用句が添えられ、さらに「群疑論説」の下には「懷感作」と朱字される。もちろんこの引用句と朱字部分は『安心決定鈔』にはない。

すなわちはじめに「一正念念仏往生」の下に「阿弥陀經説」と続けて書かれたのではなく、四種往生の簡条書きと引用文を書いて後、下の余白に出典が記入される。それは原文を直接に書写する形式ではない。『西方指南抄』中本巻の冒頭文「聖人御在生之時云々」の次の行に「御年六十有六也」とあるが、「四種往生事」も同じ書き様である。すなわち黒谷の聖人の「四種往生」

の黒谷聖人の御料簡についての親鸞の改訂であるといえる。

『西方指南抄』はしたがってその書き方から判断して、『安心決定鈔』の往生名と出典を正確にするためと認められる。それ故に『安心決定鈔』は『西方指南抄』の前に来る。

親鸞の著述活動は『西方指南抄』の前後年に俄に活発になることは事実である。それらの著述と『安心決定鈔』との比較によって、後者の成立時期を特定できないであろうか。またその頃に親鸞の書簡によれば鎌倉念仏訴訟の裁許がその論人の性信の勝訴に終わり、その後息男善鸞義絶事件がその訴訟事件を契機にして起こったのは周知のことである。

『安心決定鈔』の設立時期を特定するとき、年月日が明記される親鸞のその頃の著述に関係づけると、『安心決定鈔』の時期についての多くの基準点を利用することができ、さらに少なくともそれらとの前後関係からその成立時期の見当は付けやすい。

『安心決定鈔』に多用される接続詞「かるかゆへに」が親鸞の著述に登場するのは1255年8月6日の奥書にある『浄土三経往生文類』の途中からである。その表紙裏に性信を開基とする「横曽根報恩寺」の墨印が押されている。それが『安心決定鈔』の成立時期を示唆する。その接続詞は『西方指南抄』にも多用され、特に下末の冒頭の「念仏の事（『和語灯録』では大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす）御返事」と中末の「鎌倉の二品比丘尼へ御返事」にもいくつか見える。

『安心決定鈔』空観本の「種々の方便をとく。敎文（蓮如本は「敎門」）ひとつにあらず」の「敎文」は、『西方指南抄』中末の「鎌倉の二品比丘尼へ御返事」において「浄土の敎文」（全書四169）として見える。そして「たとへばときどきひとに見参みやづかひするににたり」の「みやづかへ」は、同じく「これ弥陀如来の御みやづかへとおほしめすべく候也」（四172）に見え、また親鸞が建長年間に東国門徒たちに何度も書き送った『唯信抄』にも、「たとへばみやづかえせむに」とある。

また『安心決定鈔』の経釈の引用文の多くは『西方指南抄』上本・末「法然聖人御説法事（漢語灯録の「逆修説法」から「乃至」によって大幅に削除）」にも見える。但し「乃至」によって削除された『法事讃』の「極楽無為（中略）専復専」は『唯信抄』の作者聖覚の釈文（二745～）に、前述の「みやづかえ」

の用語とともにそれより一層詳しく見える。

『西方指南抄』は影印本の平松令三解説に赤松俊秀に依って「長短まちまちであり、種数の収録順序も甚だ雑然としており、明確な編集方針がうかがい得ない」とあるが、われわれの『安心決定鈔』の視点から見直せば、必ずしもそうは云えないことが分かる。

まず上本・末の「法然聖人御説法事」は当代一の説法者法然の集大成であり、『安心決定鈔』の黒谷聖人の「四種往生」の料簡について補説の役割を果たす。そしてそれに続く「わずか四行という短文」は「法然聖人御説法事」の末尾の余白を利用して、中末巻の「源空上人私日記」の法然讃から一節を引用し、そして添え書きを割り書きしたものであり、東国門徒への一種の黒谷聖人についての紹介文であるといつてよい。

そのような趣旨の文は中本巻に多い。「三昧発得記」、「法然上人御夢想記」、「法然上人臨終行儀」、「聖人の御事諸人夢記」がそれである。中末巻の「源空上人私日記」の法然讃の他に「鎌倉の二品比丘尼へ御返事」、「基親の書信・法然上人の返書」、下末巻「九条殿北政所御返書」なども当然その範疇に入れてよい。

他にも「七箇条起請文」は浄土門の行者の在り方を指示し、その末尾の署名簿における「善信」は門下における親鸞の位置付けを示す。そしてそれに続く「葬家追善事」は法然没後の親鸞の身の処し方を示す根拠となる。そして下本・末巻には東国の御家人層への返書が多い。その他に内容上の関連性の高い文も少なくない。したがって『西方指南抄』は『安心決定鈔』を指導的に補完すると云える。次にそれ以前の著述について検討する。

4. 建長八（1256）年の『往生論註』加点本ならびに「四十八誓願」との関係

『往生論註』加点本（影印本）の親鸞の奥書に朱筆で「建長八歳（1256年）丙辰七月二十五日愚禿親鸞八十四歳加点了」と書かれるが、それと『安心決定鈔』との関係は先行研究の視野にない。専ら前半の曇鸞伝の加点について『尊号真像銘文』（影印本）（1258年6月28日）の本巻のそれと比較して、その相違を問題視するだけであるが、われわれは『安心決定鈔』の「天親菩薩の『往生論』に云々」の文との関係で、その後半の「註解往生論裁成両卷事出釈迦才三卷浄土論也」の『往生論』に注目する。親鸞の主著では『往生論』

の用例はなく、専ら『浄土論』であり、「天親」が用いられ、「世親」の用例を見ない。

親鸞は『入出二門偈頌』(1256年3月23日)の冒頭に「宗師是れ名く『浄土論』此の論を亦曰く『往生論』」とし、「旧訳天親此は訛れるなり。新訳には世親是れを為す正と」とする。また『尊号真像銘文』(1258年6月28日)に「この論おほ『浄土論』といふ、また『往生論』といふ也」とした上で、『弥陀如来名号徳』(1260年12月2日)に「不思議光仏のゆへに尽十方無碍光仏とまふすと世親菩薩は『往生論』にあらはせり」と腐心する。

『四十八誓願』(1256年4月13日)の原本は、漢文体であるが、『安心決定鈔』冒頭の「弘誓は四十八なれども第十八願を本意とす。余の四十七はこの願を信ぜしめんがためなり。」の補説である。これもこのように実に大胆に省略する『安心決定鈔』を補完する。

5. 建長七(1255)年の『愚禿鈔』との関連性

『愚禿鈔』(1255年8月27日)は『安心決定鈔』と同じく原本が失われ、蓮如本(1446年)より前に専修寺の顕智本(1293年)、浄興寺の周観本(1341年)、そして常楽台の在覚本(1342年)があるが、顕智本の影印本は『影印高田古典二』(1999年)に収まる。

『愚禿鈔』上下巻の四行題詞は単純な構文であるが、難解とされる。それは上・下巻の巻頭に「聞賢者信 顕愚禿心 賢者信 内賢外愚也 愚禿心 内愚外賢也」と記される。

なぜ同じ四行題詞が付くのか。賢者とは誰を指すか。われわれは四行題詞の加点の精粗に注目した。加点は三本ともに下巻に詳しく、上巻は簡単に付けられる。文中の浄土教の善導和尚も上巻は散善義を「光明寺和尚曰」に対し、下巻は「唐朝光明寺和尚『観経義』云」とより詳しい。(拙稿『『愚禿鈔』の死生観の教育哲学的研究』1995年、参照)

上・下巻における加点の精粗の逆転を活用すれば、上巻と下巻が逆になり、まず顕智本の場合に上巻にのみ奥書がある変則が解消する。さらにそれによって『安心決定鈔』の接統詞「カルカユヘニ」に導かれる筆者の文に対応する『愚禿鈔』の「応知」に終わる親鸞の文が七対に纏まり、起承転結に体系化されて、われわれにもわかりやすくなる。

それと同じように、『安心決定鈔』も本来本文と一つ書きとを入れ替えて読み直すと大変に分かりやすくなる。それは本文と一つ書きとの文の性質の相違を浮き彫りにする。さらにその逆転は「南無阿弥陀仏とはなづけたり」の次に、「若我成仏十方衆生云々」が位置付けられて、それが『教行信証』後序の「真影銘以真筆令書南無阿弥陀仏与若我成仏十方衆生称我名号下至十声（中略）衆生称念必得往生之真文」を示唆することに気付かされる。それによって『愚禿鈔』は『教行信証』と『安心決定鈔』とを媒介するのである。

四行題詞の「聞賢者信 顕愚禿心」とは賢者と愚禿との人間関係ではなく、賢者信と愚禿心の関係を「賢者信 内賢外愚也 愚禿心 内愚外賢也」と捉えることによって、名目とされる『安心決定鈔』の「機法一体」の関係として捉えられて、改めて「機法一体」の関係概念が捉え直されるのである。したがって四行題詞は「機法一体」の親鸞の解釈であり、さらに『安心決定鈔』の基本的性格を明らかにする重要な手掛かりを含むのである。

親鸞は『愚禿鈔』によって、自らも賢者信を聞くことによって愚禿心を顕わしたことを示し、その「顕」とは『顕浄土真実教行証文類』のそれである。機法一体にして賢者信を聞くことによって、愚禿心は『愚禿鈔』下巻の「深心釈」の第七の「自心」（二467）になる。すなわち『安心決定鈔』も四行題詞が示す「機法一体」の一種の「聞書」である。

6. 『教行信証』との関係

さらに『安心決定鈔』は主著『教行信証』行・信巻の老筆による七行書きの差替え部分との関係も深い。たとえばその行巻32頁以降3頁にわたる「五百長者の子」の物語は、主著のここ以外には出ず、『安心決定鈔』において筆者が『守護国界経』から大意を取った「五百の長者の子は臨終に仏名をとへたりしかども云々」の補説となる。また信巻序の趣旨と本文冒頭の「念仏往生之願」も『安心決定鈔』の「四種往生の事」を補説する。そこに「往生」の用語が27事例も出るのを始め、『安心決定鈔』のその用語は非常に多いにもかかわらず、そこには全く「念仏往生」の用語は見えないのもその特徴の一つである。

先行研究は『教行信証』の脱稿時期と伝持過程を明らかにしないが、1255年6月22日の専信の「専修寺本」、証・真仏土巻の表紙袖書の蓮位、巻末と

同筆の行巻末の性信への伝持過程が、『安心決定鈔』との関係によって脱稿時期とともに容易に明らかになる。

その解決の糸口は信巻表紙裏におけるその本文（一268～270）の涅槃經の抜粋である。それは二箇所から引用され、『復有一臣名悉知義』（268）と「昔者有名王名曰云々無一王生愁惱者_文」（269～270）とする。但し後者の文に一字「已_テ」が欠落する。そこに親鸞の親の情を反映すると認められる。したがってこの文は当時の親鸞自身のことを指す。

信巻の表紙に反古紙の裏を使ったとする説は、引用の中略の意味と何よりも「已」一字欠落の意義を見落としているのである。これは『安心決定鈔』とその背景が不明のためである。その表紙裏の文は「専修寺本」になく、専信の書写以後に追加されたからである。まず袖書から判断して親鸞から弟子の蓮位に授与されたとする説は、たしかに根拠があるが、蓮位の役割は追加された朱筆の内容から、読みやすくするために加点を追加することが、朱筆の加点と「明」の表記から知られる。そこに親鸞独自の古体表記と異なる普通の「明」が書かれている。真仏土巻の内題に「光明無量之願」（真蹟）と内題の右に添えられた朱筆の「光明無量之願」（異筆）とを比べれば一目瞭然である。専信の「専修寺本」にはその朱筆部分はない。そしてその表紙の袖書に「釈蓮位」とある。

したがって親鸞は何か事情があつて、取り急ぎ蓮位に朱筆を委ね、行・信巻などへの加筆改訂後、専信に書写させ、その後間もなく性信に信巻の表紙裏の文を付けて授与したのである。

証巻の内題の前頁に「必至滅度之願 難思議往生」の二行、方便化身土巻の内題の前頁に他の二往生「至心発願之願」の下に「邪定聚機」と「雙樹林下往生」が並立し、その右傍に朱筆で「無量寿仏觀經之意」そしてそれらの左に「至心回向之願」の下に、「不定聚機」と「難思往生」が並立しそしてその右傍に朱筆で「阿弥陀經之意也」が出る。それら「難思議往生」と「雙樹林下往生」と「難思往生」の三往生は、『浄土三經往生文類』、『愚弁鈔』下巻末にも出る。したがってそれらは『安心決定鈔』の四種往生を補正する。

7. 年月日明記の親鸞書簡

当時の親鸞書簡の発給は多いが、年月日が明記されているのは1256年5月

29日付けの義絶状と1255年10月3日付けの笠間の門弟への回答状（真蹟集成四）である。前者は善鸞宛と性信宛の二通あり、善鸞宛は真宗高田派教院編『影印高田古典三』（2001年）に見え、後者は原本が東本願寺にあり、われわれはともに影印本も入手できる。

それとほぼ同じ書状が、「念仏者疑問」の表紙に「釈覚信」の袖書が付いて、専修寺にある。これは「念仏スル人々ノナカヨリウタカヒトワルル事」の内題が付き、「ソレ浄土宗ノココロハ」に始まり、1256年4月13日付けの発給である。これは『影印高田古典一』（1996年）に見える。東本願寺本は「かさまの念仏者のうたかひとわれたる事」の内題が付き「それ浄土真宗のころは」に始まる。笠間は性信の教圏内にあり、末尾の「これさらに性信房親鸞がはからいにあらず候ゆめゆめ」とともに性信と親鸞の関係を示唆する。

当時の性信は善鸞義絶の原因となった鎌倉念仏訴訟に論人として孤軍奮闘の結果勝訴した親鸞の高弟の一人である。本文中に「十方恒沙の諸仏証人とならせたまふと善導和尚は釈したまへり」とあるのは、訴訟の影響と考えられる。しかし9月7日付け性信宛親鸞書簡には「また十方恒沙の諸仏の御証誠なり」と元通り「証誠」に戻している。

二通の義絶状について真偽が問われているが、性信宛ては文中に「そらごと」と「としごろ」がそれぞれ5回出て、善鸞宛の「そらごと」9回とともに、親鸞の無念の思いが感じ取られ、真であると見てよい。後者に「第十八の本願をしほめるはなにたとえて人ごとになすてまいらせたりときこゆることまことにはうぼうのところが又五逆のつみをこのみて人をそむじまどわさることかなしきことなり」は『安心決定鈔』の反論と照応する。しかし前者の末尾の下りについて先行研究は、なぜ親鸞が性信に「かやうの御文どもこれよりのちにはおほせらるべからず」と命じたのか、「また『真宗の聞書』性信坊のかかせたまひたるはすこしもこれにもうしてさふろうやうにたがはず候へばうれしう候『真宗の聞書』一帖はこれにとどめをきて候」の『真宗の聞書』とは何を指すか、なぜ「この『唯信抄』かきたるやうあさましう候へば火にやき候べし」なのかなど、なお疑問を残す。

『唯信抄』などの御文は「慈信が法門によりておほくの念仏者たち弥陀の本願をすてまひらせあふて候」ように論旨のすり替えがなされたからであり、「この『唯信抄』」は書き様が「あさましう候へば火にやき候べし」とあるの

は、改竄を示唆すると見てよい。

『安心決定鈔』の引用経釈は、真聖全が注記するように、その法語体の多くは大意であり、聞書体であり、その分量も一帖分であるから、「性信坊のかかせたまひたる」『真宗の聞書』一帖を指し、それを親鸞の手元に「これにとどめをきて候」とそれがその後長く88歳の親鸞の著述に至るまでの著述と深く関わることと無関係でない。ではそれはいつからかについては、鎌倉訴訟のことと触れた親鸞の7月9日付けの性信宛書簡における「御文のやうおほかたの陳状よく御はからひどもさふらひけりうれしくさふらふ」に直結する。ここには鎌倉訴訟の間注所に提出された訴状、それが引付奉行人を通じて論人の性信に示された問状、などの三問三答の片方が見えないため、上述の義絶状によって推測する他はないが、『安心決定鈔』の本文と一つ書きをその文脈に乗せると理解しやすくなる。

陳状の主文にあたる「一自力他力日輪の事」は第一答状に、「一四種往生の事」は第二答状に、そして「譬え」を多用するその他は第三答状に、それぞれ対応させることができる。また本文中の「無為とはなすことなしとかけり」は明らかに口述文を表すから、引付奉行人立会のもとに行われる口頭対決における論人の性信の口述記録と見ることができる。そして本文の対句的表現、「ゆへに」と「かるかゆへに」の使い分け、重層的反復等のレトリックは法廷弁論の文脈に乗せると分かりやすく、聞き取りやすい説得調になる。

性信は訴人に対して、本文にあるように一貫して、同じ浄土門の「われら」と語り掛けるが、それを一つ書きでは一切出さない。性信は一つ書きの反論の後、本文においては訴人側との融和を図る。それが親鸞の云う「よく御はからひども」である。それは親鸞にとってこの上ない喜びであり、「うれしくさふらふ」という所以でもある。

この7月9日付けの書簡は冒頭に「六月一日の御文くわしくみさふらひぬ」とあるように、『安心決定鈔』の成立の時期はしたがって1255年6月1日と見てよい。そして作者を性信と仮定しても大過ない。

なお、『安心決定鈔』における「かるかゆへに」に導かれる文は次の通りであるが、いずれも『愚弁鈔』の「応知」で結ばれる親鸞の文と同じように、筆者の主張を表す。それらを中核にして二十の節が構成される。そして五節

毎の四章に纏められる。その章節構成によれば、空観本、蓮如本のような「『往生論』に云々」で区切る二巻構成でなく、本文と一つ書きから構成される一帖本である。

この章節構成に重要な引用経釈が次のように配置される。「若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正觉」（1）と「如無量寿經四十八願中唯明專念弥陀名号得生」・「又此經定散文中唯標專念弥陀名号得生」（8）の三経釈は第十八願を表し、「諸仏如来是法界身入一切衆生心想中」（12）は機法一体の念仏三昧を表し、「如来淨華衆正覺花化生」（13）は「本願はしほめる花」説を反論し、他力の信心を得た人は凡夫の泥濁に染まない悟りに帰ることを表し、「極樂無為涅槃界隨緣雜善恐難生故使如来選要法教念弥陀專復專」・「法身常住比若虚空」（14）は一種の教相判釈を表す。そして「一四種往生の事」の「心不顛倒即得往生」・「歸命尽十方無碍光如来」は譬えによって他力不思議の歸命の信心を表す。

したがって1255年の『安心決定鈔』の「機法一体」は文献上もっとも古いことになる。

8. 小 括

以上の『安心決定鈔』成立時期の検討の結果を簡条書きに示せば、以下のようになる。

1. 「四種往生の事」は往生についての法然上人の料簡とされるが、『西方指南抄』下末巻の冒頭の「四種往生事」以外に法然伝に類似の文献を見ない。
2. 『西方指南抄』の「四種往生事」は影印本の観察によれば「四種往生の事」の修正版であり、時期的に『安心決定鈔』のその後になる。
3. 『西方指南抄』前後の親鸞は俄に多作であり、それ以前の著述にも『安心決定鈔』の修正が認められる。たとえば一つ書きにおける「天親菩薩の往生論」について1256年7月25日の『往生論註』加點本の奥書末尾、同年3月23日の『入出二門偈頌』冒頭文にその修正文が認められる。
4. 横曾根報恩寺の墨印が表紙裏にある1255年8月6日の『浄土三経往生文類』は「四種往生の事」のもう一つの修正文であり、同じ趣旨の修正文

が同月27日の『愚禿鈔』下巻の末尾にもある。

5. その三往生はさらに性信の奥書が行巻と末巻にある「教行信証」の標拳文にも認められる。標拳文は『西方指南抄』と筆致が酷似する老筆である。そして行巻の老筆七行文に見える「五百長者の子」の用例は『教行信証』ではそのみであり、一つ書きの同句を經典の文脈に補正した下りである。
6. そして『四十八誓願』は本文冒頭に自明のように語られる本願論「余の四十七はこの願を信ぜしめんがためなり」の補足である。
7. このような修正・補足は『西方指南抄』以後の著述、例えば88歳の1260年12月2日の「弥陀如来名号徳」にも認められる。
8. それら一連の著述の多くに『安心決定鈔』の特色のある接続詞「かるかゆへに」が用いられる。しかし『浄土三経往生文類』の途中が親鸞の著述におけるその初出である。
9. したがって『安心決定鈔』は親鸞晩年の著述に照らして1255年夏の成立である。
10. そのころの親鸞周辺の出来事は鎌倉念仏訴訟とそれに繋がる息男慈信義絶であり、その委細はもっとも多く残る性信坊宛て書状と本人宛て義絶状に示される。
11. 訴状に触れた7月9日付け性信坊宛て書簡に、訴訟における論人の性信「陳状」についての親鸞の評価と謝辞があり、訴訟の経緯が綴られる。
12. 訴訟の影響は1255年10月3日付けの「かさまの念仏者のうたがひとはれたる事」に「十方諸仏の証人」という形で認められる。しかしその後の性信宛の書簡に「証誠」となる。なおその書簡末尾に「性信坊親鸞がはからひ申にはあらず候ゆめゆめ」と異例の師弟の併記がなされる。それ故に7月9日付け書簡は訴訟の劇的な結末を生々しく伝えるから、その冒頭の6月1日付けの性信書簡に対する親鸞の1255年の返事である。
13. そのことから訴訟と密接に関連する1256年5月29日付けの性信宛て義絶通知状にある「真宗の聞書性信坊のかかせたまひたるは」の聞書とは、その文脈から判断すれば明らかに訴訟において論人性信が口頭弁論を補佐役の入信に書き取らせたものに他ならない。
14. さらに『安心決定鈔』の本文に見える性信の弁論は訴訟手続き上、時

期的に第一段階の一つ書きの陳状の後に、第二段階の対決として位置する。これが本文にあたる。

15. このような一つ書きと本文との倒置を示唆するのが『愚禿鈔』の上巻よりも下巻に詳しく加点が付く四行題詞である。難解とされる『愚禿鈔』はまず上下巻を逆にすると、『安心決定鈔』の「かるがゆへに」に対応する「応知」が末尾に付く親鸞の主張の体系的文脈が分かりやすくなり、さらに『愚禿鈔』顕智本における下巻に奥書がなく、上巻にのみ奥書があるという変則が、その倒置法に気付けば、自明になる。
16. したがって『安心決定鈔』の成立は1255年6月1日に鎌倉念仏訴訟を背景にした性信の陳状を中心とする。そして親鸞の旺盛な著述活動の謎はその成立の解明とともに解消する。

以上のとおりわれわれが『安心決定鈔』の成立時期の解明によって、親鸞の晩年の教育活動の一端を捉えることができた。したがって『安心決定鈔』が蓮如と同様に大きな影響を与えられたのは親鸞聖人である。この小論は『安心決定鈔』の成立事情の素描である。

